

14. 山村留学経験者の心の成長プロセスの研究

～留学経験者の意識がいかに変化し地域生活に活かしているのか～

埜崎 健治 神奈川県小田原児童相談所(現:神奈川県秦野保健福祉事務所)

(1) はじめに

「山村留学」とは、都市部の子供が数カ月から数年間の長期にわたって家族のもとを離れ、農山漁村で生活し、学ぶこと、およびそうした子どもたちの受け入れを目的にして農山漁村で行われる教育支援事業のことである(川前ら、2005)。

山村留学は昭和51年に長野県から始まり、平成17年度現在、山村留学を経験した児童は全国155市町村の285校でのべ13,288人にのぼる。

山村留学の本来の目的は、自然体験の場であるが、家族と離れて集団生活を行うことで、子供の『心の成長』を遂げる場として機能することが注目されてきている(2007山下)。

近年では不登校、いじめ、家族関係の悪化などの課題を抱える児童が問題解決のために留学することが増えてきている。しかしながら、なかには途中で参加を断念してしまったり、留学を終えて地域に戻ると元の不規則な生活に戻ってしまう子供もいる。共同生活を行う中で、逆に問題が深刻化する例も報告されている(2003木村)。

参加者のニーズ、タイプが変わってきている。そのため、山村留学関係者が新たな支援方法の確立が求められている。

よって本研究では、山村留学経験を通じて子供たちがどのように変わり、留学の経験が留学後の生活にどのように活かされているのかを明確にすることで支援方法の確立の一助にしたいと考える。

(2) 今回の研究対象となった山村留学先の概要

A学園に留学する児童たち(以下、留学生)は出身地からB村に住民票を移し、共同生活をしながら地域の学校に通い、年間を通してB村で生活をして地域のさまざまな活動・行事に参加する。留学生は数名の相部屋で共同生活をする。起床時間や食事の時間などの一日のスケジュールは決まっており、毎日、自主学習や読書をし、身体も動かす。また、洗濯や食器洗いや掃除などの身の回りのことはすべて各自で行わなくてはならない。

また、留学費用が年間約100万円かかる他、行事等への参加、夏季、冬季などの長期帰宅時の送迎など保護者の負担もある。

(3) 研究方法

調査期間 6か月(2012年10月～2013年3月)

調査対象者 山村留学経験児童(A学園卒業後3年以内)12名にインタビューを実施した。

インタビュー(半構造化面接)内容 1人あたり1時間程度。質問項目は以下の通り。

- 1 なぜ、山村留学に参加しようと思ったのか？
- 2 山村留学に参加してよかったこと、楽しかったことは何ですか？
- 3 山村留学に参加してつらかったこと、苦しかったことは何ですか？
- 4 山村留学に参加して学んだこと、変わったことは何ですか？

これらの質問に対する回答を録音し、テープ起こしをして逐語化した。そしてそれを実践的な活用を意図して考案された修正版グランデッドセオリーアプローチを用いて分析した。

(4) 結果

グランデッドセオリーを使うことにより 24 の概念を抽出した。その一例を表 1 にあげる。その後、概念より 18 のカテゴリーを生成した。

以下、グランデッドセオリーにおける「ストーリーライン（生成した概念を使って文章化すること）」を用いて、結果を記入する。（ ）表記の番号は概念を表す。

表 1 抽出した概念の一例

概念名	2 このままじゃいけない
定義	生活の乱れ、いじめ、不登校など参加者自身が課題を抱えており、問題解決のために山村留学を決意している。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に行けなくなったので、A学園に行こうと思いました。 ・(だらけた生活やいじめられたことが行く理由になっている?) それもありますね。 ・小学校の頃、結構だらしなくて、学校に全然ちゃんと行っていなかったの。 ・崩れちゃっていた生活リズムが戻るかなって思って。 ・自己中な考え方をしていてこのままじゃいけないと考えて。
理論メモ	自然体験だけでなく、問題解決のために参加する人が多い。 参加することで問題解決につながるのか？再発はしないのか？

【概念名】概念の内容を一言で説明する名

【定義】概念の意味する内容

【具体例】概念を最もよく表現しているデータを選出し表記する。

【理論メモ】解釈の思考プロセスの記録。定義とはならなかった他の解釈案、解釈のときに浮かんださまざまな疑問やアイデアなどを記録する。

ストーリーライン

本来の山村留学の主たる目的である色々な自然体験をしたい（1 自然体験）という理由以外に生活の乱れ、いじめ、不登校などの問題解決のために参加（2 このままじゃいけない）していたり、家族との関係が悪く家を離れたい（3 居心地の悪さ）という気持ちから参加している。

留学生活ではスキー、焚火、川遊びなどのさまざまな楽しい活動（4 さまざまな経

験)がある反面、ゲームも携帯もTVもなく、洗濯・掃除・食事作りと自分のことはすべて自分でやらないといけないという楽しいながらも厳しい生活(5 厳しい生活)であった。

24時間一緒に生活する中では自分の思い通りに行かないことも多いが、協力しないと生活ができず、留学生同士の距離は縮まっていった(6 同じ釜のめし)。

学校生活では留学生ということもあり浮いた存在に感じることや、通学生のTVやゲームの話題についていけないことなどから距離を感じることもあった(7 通学生との溝)。そしてそのことがかえって留学生同士の結束を強めていった。

留学生活になれてくるとゲームや漫画、パソコンのある自由な生活に戻りたい気持ちが強くなるが、留学生同士で支え合い乗り越えていった(8 帰りたい気持ちを乗り越えて)。

留学生は色々な理由から留学の終わりを決意する。経済的な問題や家族の負担(行事への参加、長期帰宅の送迎等)などから留学生は継続を希望しながらも修園を余儀なくされることも多い(9 親の都合)。

山村の学校は少人数で競争が少なく、塾などの学習支援体制が乏しいことや、身の回りのことや各種行事の参加が忙しく十分な勉強時間が確保できないことに不安を感じて修園を決意するものもいる(10 勉強をするため)。

留学を決めた時から1年間と期間を決めて参加した留学生も多い(11 期間限定)。

身の回りのことをすべて自分たちでやらなくてはいけないことやゲームや漫画のない不自由な生活に限界を感じ、修園を選ぶ留学生もいる(12 もう限界)。

留学生活では周りの協力がなしには生活を成り立たず、常に一緒に生活する中で、他人を思いやる気持ちが育まれる(13 人の気持ち)。

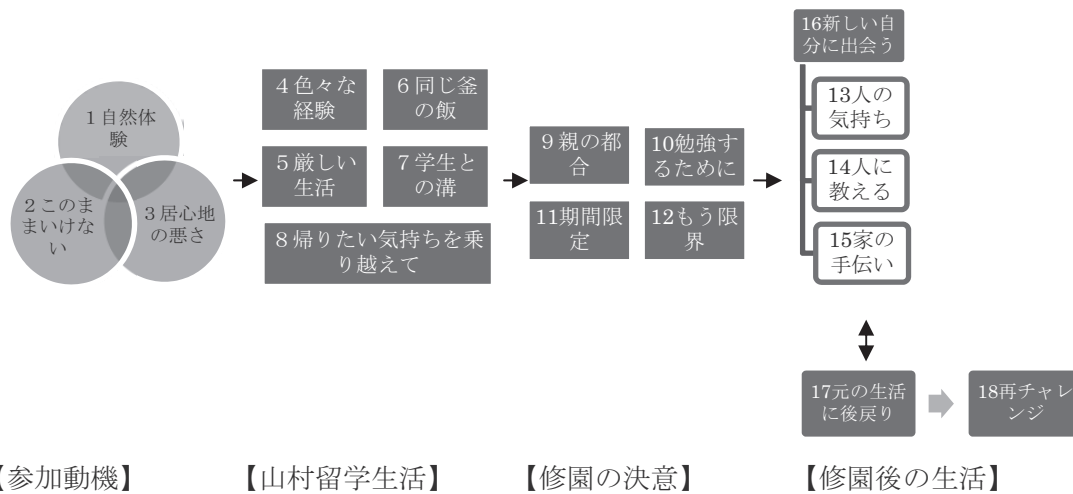
基本的に留学生は小学生と中学生から構成されており、上級生は下級生の面倒を見たりすることが多い。低学年であっても、留学生活が2年目以降になると1年目の留学生に教える機会が増える(14 人に教える)。

自分のことは自分でやるのが当たり前になり、食事作りのレパートリーが増えたり、洗濯、掃除が上手になる。

修園後、家の手伝いが自然にできるようになったり(15 家の手伝い)、学校では人に教えることに抵抗がなくなったり、自分が思いやりの心を持てるようになったことに気がつく(16 新しい自分に出会う)。

その反面、修園後は規則正しい生活を強いられなくなることで、生活がだんだんと乱れたり、勉強をするために家に帰ったのに、かえって留学中より勉強をしなくなったりと以前の生活に後戻りしてしまうことも少なくない。中には昼夜が逆転して朝起きられず学校に遅刻することが増えたり、地元の学校生活や友人になじめずに不登校になるなど留学先の学校と出身地の学校とのギャップに苦しむ場合もある(17 元の生活に後戻り)。

元の生活に戻ってしまった子供たちの中には山村留学経験から親元をから離れたほうが規則正しい生活が送れることに気づき、自ら全寮制の学校を選択することもある(18 再チャレンジ)



(5) 考察

①参加理由について

大竹(2005)が述べているように今回のインタビューでも山村留学本来の目的である自然体験以外に対人関係の問題や不登校などの課題を抱えた留学の参加が一定数見られた。

課題を抱えた児童の参加については集団活動に支障がなければ参加は可能である。しかし、木村(2003)が指摘しているように山村留学は本来的には自然体験の場であり、いじめや不登校の支援機関ではない。それゆえ、それらの問題の根本的な解決に至らない場合がある。時には留学中断を余儀なくされ、新天地でのやり直しを期待したにもかかわらず、またつらい思いをする場合もある。留学参加にあたっては児童、保護者、支援者で十分な話し合いと準備が必要である。

筆者が考える参加に適していると思われる要件は次の通りである。

- 1 本人・保護者共に山村留学の内容・目的を理解し、参加を希望している。
- 2 精神疾患、知的障害、発達障害がない。
- 3 反社会的問題行動（喫煙、飲酒、窃盗等）がない。
- 4 集団生活に参加できるだけのコミュニケーション能力が備わっている。

また参加理由には家に居場所がなかったり、親から離れたいからという意見も多い。大竹(2005)が指摘しているように本研究からも思春期に生じやすい親との葛藤からの合法的な家出的意味合いと家庭の事情で託児所代わりに留学させている親の在り方の2つの要素が浮き彫りになっている。

②修園の決意について

親の都合や勉強時間を確保するために修園を決意した留学生に比べて最初から1年限定と決めて参加した留学生や厳しい生活に限界を感じていた留学生のほうが出身地に戻ってからの生活の乱れが大きい傾向がみられる。

学習面での不安を感じて修園した場合にはその多くが携帯、漫画、ゲームなどの誘惑に負けて留学中よりも勉強しなくなるという結果が得られている。

③修園後の生活について

山下(2007)は『山村留学を終えて地元にも戻ると元の不規則な生活に戻ってしまうという事例がしばしば生じる』と述べているように程度の差はあれ、ほとんどの児童において生活の乱れは見られた。中にはいじめや不登校などの問題が再発する場合もある。

しかしインタビューの中で留学生が「集団生活に抵抗が少ない。他の人よりもそういうノウハウに自信があったから」「家にいたら甘えてダメになる。少人数で面倒を見てくれる寮生活した方が向いている」と話しているように留学に参加した事で集団生活への抵抗感が減り、親元を離れたほうが規則正しい生活が送れることを気づき、自ら寮のある学校を選択しやり直している留学生もいる。

つらいときや苦しいときにA学園でのアルバムやHP・ブログを見たり、修園生同士で連絡を取りあって、頑張っているケースもある。このことから地域に戻ってから問題が再発した場合にも留学経験は生かされていることが伺える。

(6) 終わりに

筆者が不登校・いじめ・親子関係修復などの相談を受けることは少なくない。その中で、山村留学を紹介することがある。留学後数ヶ月で相談終了になるため、その後の様子がわからなかった。本来の目的(自然体験等)とは異なる利用方法であり、山村留学を紹介したことが良かったのかと考えてしまうことがあったが、本研究により出身地に戻った後、問題が再発する場合においても留学経験が色々な形で活かされていることが明確になった。

しかし、途中退園をしてしまったケースについては明確にすることはできなかった。これは今後の課題である。そして本研究で示された山村留学生の心の成長のプロセスは、今回、研究の対象とした特定の集団において見出されたものであるから、集団の構成員やフィールドが変化すれば成長のプロセスの様相も異なる可能性がある。今後、様々な山村留学集団、及び児童集団を対象に同様な研究を行うことが必要である。

参考文献

川前あゆみ・玉井康之(2005) 山村留学と子ども・学校・地域・自然がもたらす生きる力の育成 高文堂出版

大竹智(2005) 山村留学の在り方に関する一考察 立正大学社会福祉研究所年報第7号

木村葉子(2003) 子どもが育つ環境の検討 佛教福祉学 / 種智院大学仏教福祉学会

山下稔哉他(2007) 田舎”体験と子どもの精神的自立 山口大学教育実践総合センター研究 紀要第23号

IC レコーダー	10000 円	10000 円
交通費・通信費・謝礼等	交通費等 102000 円 謝礼等 44000 円	146000 円
テープ起こし代	12 人×12000 円=144000 円	144000 円
計		300000 円